神戸女学院大学論集　第62巻第２号　Kobe College Studies Vol. 62 No. 2（December 2015）

# 多元的夢分析の方法に向けて

吾　妻　　壮

# Toward a Pluralistic Method of Dream Analysis

AGATSUMA Soh

神戸女学院大学 人間科学部 心理・行動科学科 教授
連絡先：吾妻　壮　〒662-8505　西宮市岡田山4-1 神戸女学院大学人間科学部心理・行動科学科
agatsuma@mail.kobe-c.ac.jp

## 要　旨

夢分析は、S. フロイトによって創始された精神分析における極めて重要な方法の一つである。夢分析の方法は、夢を幼児的願望の偽装された表現として考えるというフロイトの画期的な考えによって始まった。近年、夢の内容的側面のみならずプロセス的側面について論じようという試みが、特に関係論的思考を持つ分析家によってなされてきた。この論文では、夢の相互作用的性質を明らかにする夢分析の方法の発展について探求し、このように拡張された方法の重要性を論じる。理論的議論の臨床的意義を探求するために臨床素材を提示する。



**キーワード：**夢、精神分析、相互作用、エナクトメント



## Summary

Dream analysis is one of the quintessential methods in psychoanalysis, which was founded by S. Freud. The method of dream analysis started with Freud's innovative idea, which considered dreams as disguised expressions of infantile wishes. In recent years, there have been attempts to address not only the content aspect of dreams but also the process aspect of them, particularly among relation-oriented analysts. In this paper, the author examines the development of the method of dream analysis which has shed light upon the interactive nature of dreams, and argues for the importance of such expanded method. Case material is presented to explore the clinical significance of the theoretical discussions.



**Keywords:** dream, psychoanalysis, interaction, enactment

## はじめに：無意識への「王道」から「常道」へ

S. フロイトが無意識への王道として夢を論じたことは広く知られている。フロイトの言う通りならば、無意識の系統的な探究の方法である精神分析において、夢分析が実践の中心に据えられることは必然である。そしてフロイトは概ね正しかったと言える。実際、フロイト以降精神分析は多様化の道を辿ったが、今日でも、日々の実践において夢分析が重要であることは変わっていない。

もちろん、フロイトの「王道」説に対して異を唱える者がいなかったわけではない。夢の「王道」性に向けられた懐疑的視線は、例えば、無意識の顕現の前に立ちはだかる自我の防衛の分析を重視することで知られる自我心理学派の分析家達の中に見られた。例えば、C. ブレナー（1969, 1995）は、一部の夢が無意識の探索に重要な示唆を与え得ることを認めつつも、夢分析の持つ魔術性を警戒し、夢という現象全般の価値を過大評価する傾向に警鐘を鳴らした。ブレナーにとって、夢分析によって到達し得る無意識の領域は、他の一般的な精神分析技法、例えば自由連想の流れを緻密に追うことによっても同じように到達可能なのであって、夢が特権的地位を持つ必然性はない。このように、精神分析実践における夢分析の理論的重要性および技法的有用性を巡っての批判的揺れ戻しの動きは確かに見られた。

しかしそのような動きは、言い換えれば、「王道」以外のルートの存在を指摘するものであり、あるいは「王道」それ自体が一本道ではないことを指摘するものなのであって、夢というルートに我々が過剰に依存することがないように注意を喚起するという程度の意味を持つ相対的な批判に過ぎないと言えよう。精神分析的営みにおける夢の特権性は確かに減じたが、分析家は依然として、無意識へと通ずるルートとして夢を頻繁に用いている。夢分析は「王道」から「常道」へと変わったと言えよう。

## 夢分析における多元主義

精神分析臨床におけるフロイトの夢分析の方法は、その意義に変更を加えられつつも、連綿と引き継がれている。しかし夢分析の方法の総体に目を転じるならば、フロイトの時代に比べ、遥かに多元的様相を呈している。

フロイトが夢にアプローチする際に注目したことの一つは、夢の持つ偽装性であった。睡眠中無意識的な心的内容が意識層へと近づくことで、心的装置は、睡眠の維持のために守らなければならない閾値を超えて刺激を受けてしまう可能性がある。夢作業は、心的内容に巧妙な偽装を施すことで、睡眠を妨げることなく同時に無意識的世界の求める表出の窓としての夢そのものを維持する。かくして心的装置の最深部に蠢く幼児的願望は、夢の舞台において、騒擾を引き起こすことなく充足されることになる。このようにフロイトは、偽装された無意識という観点から夢を論じ、夢分析の方法を説いた。この観点に基づくと、夢分析の作業とは、夢の偽装の表層すなわち顕在的内容の背後に偽装の深層すなわち潜在的内容を推測し、還元的読み替

えを続けることである。「A が実は B を意味する」（例：家が実は女性を意味する、ペンが実は男性を意味する、など）という、記号の読み替え作業としての夢分析である。

しかし今日の精神分析臨床においては、このような読み替えの可能性を模索することは、分析家に課せられた仕事の一部に過ぎなくなった。フロイト的な読み替えの作業に加えて、今日の分析臨床においては、同じ夢を他の複数の観点から検討することが求められている。例えば今、ある男性患者がペンを紛失した夢を語るとしよう。それを男性性の喪失として理解するだけでは、もはや不十分である。フロイト的観点に加えて他に検討すべき観点は多々あるが、例えばその一つは、転移－逆転移関係という観点である。ペンを紛失した夢を報告する男性患者は、分析家に対してどのような気持ちを抱き、どのような態度を取っているのだろうか？患者は、大切なものを紛失した哀れな自分として分析家に夢を報告しているのだろうか？あるいは、ペンの紛失の責任が分析家にあると感じ、分析家に非難を投げかけているのだろうか？患者は分析家との間に、優しくケアする母親とケアされる乳児のような関係性を期待しているのだろうか？それともサド－マゾキスティックな関係性が作られることを望んでいるのだろうか？分析家は自分のペンを貸してあげたい気持ちに駆られているのだろうか？患者は、フロイト的な、力強く貫通するような解釈を望んでいるために、無防備に分かりやすい素材を提供しているのだろうか？それに対して分析家は、患者の心が折れるような万能的な解釈をサディスティックに投与する方向へと誘惑されているのだろうか？このように、新たに検討すべき観点の中から一つだけ取り上げても、分析のフィールドが無数の問いによって満たされていることがわかる。

そして、精神分析のセッションが常に構造化された時空間の中で行われるものであることを思い出すならば、全ての観点の要求する問いに答えを用意することなどできないことはもはや自明であろう。実際の夢分析には、患者と分析家による選択が絶えず入り込む。ここにおいて夢分析は、決定論的な枠組みによってのみでは理解し得ないものとなり、患者と分析家の関係性によってその都度規定される関係性のあり方の一つの表現であることが明らかになる。

## プロセスとしての夢

フロイト以降の精神分析家グループおよびその周辺における夢分析理論は、フロイトの方法論を参照した上でそれを拡張ないし批判するというものだった。上述したように、フロイトは願望の偽装とその充足として夢を理解していたが、そのことは、フロイトの主たる関心が夢が意味するところ、夢の意味内容にあったことを示している。したがって、フロイト以降の臨床家達による様々な夢理論の多くが、夢の意味についての新たな参照点の提供の試みであったことは驚くべきことではない。C. G. ユングが夢を偽装としてではなく「補償」として理解し、フロイト理論への反論を試みたことは広く知られている。ユングにとって、夢分析の作業は偽装を読み解くことではなく、意識化されることのない自己の別の側面を表現することで自己を補償するものである。その意味において、顕在的夢内容はそれ自体として意義がある。ユングにとって、夢分析の後に立ち現われるのは偽装のヴェールの下の素顔ではなく、夢の補償作用によって複雑さを増した、しかし真正さにより一歩近づいた自己の姿である。

このようにフロイトの方法論は後の臨床家の関心を強力に方向づけたが、そのため、フロイトがあまり注目しなかった夢の側面は後の臨床家にとっても見過ごされ易い傾向があった。フロイトは、夢を無意識からのコミュニケーションであると考えた。しかしフロイトは、夢を患者から分析家に向けられたコミュニケーションそのものであるとあからさまに主張することも、夢分析の作業そのものが患者と分析家の関係性そのものの表現であると主張することもなかった。換言すれば、フロイトは夢が転移－逆転移関係がエナクト（実演）されたものであると考えていなかった。

夢を多元的に考える上で最も重要なのは、フロイトによって見過ごされていた側面、すなわち夢のプロセス的側面を夢分析の方法に導入することである。こうすることで、夢分析は、（1）夢の意味的側面、（2）夢のプロセス的側面、の二つの面から考えるべきものになる。前者は語られた夢の意味の探求であり、後者は夢を語ることの意味の探求である、と言うこともできよう。この二つが共に満たされることで、夢分析はフロイトの方法とは量的にのみならず質的にも異なる方法を手に入れることになる。

夢分析のプロセス的側面とは何か？それは日常臨床において少し注意を向けるならば容易に気づくであろう出来事の背景にも作動している。例えば、夢分析のプロセス的側面の一例は、次のような卑近な出来事の中に現れている。心理療法を始めるに当たって夢を報告するように促すと、夢を全く覚えていない、と述べる患者が少なからずいる。だがほとんどの場合、分析家が夢を持って来るように繰り返し促すだけで、このような患者の多くは夢を沢山持って来るようになる。逆に分析家が夢分析をできれば避けたいと思っていると、患者は夢を忘れ、報告しなくなるものである。また、患者が夢を大量に持ってくる場合があるが、それは無意識的情報が大量に存在するということを素朴に表しているわけでは必ずしもない。それは、分析家を前にして、充実した無意識的世界を生きている人間と見なされたい、という患者の願望の表現である可能性がある。このように、夢を報告するという単純な行為の中にも、分析家との関係の今－ここでのあり方が入り込んでいる。

分析家との関係性と一見無縁であるかに思われる夢の内容もまた、夢分析のプロセス的側面の影響下にある。例えば、分析家の分析理論を患者が暗黙の裡に察すると、分析家の理論によく馴染むような夢を患者が持って来るようになることがしばしば経験される。古典的なフロイト的夢分析を好む分析家には、エディプス状況が歪曲され、潜在化しているような夢素材を患者が持って来るようになることがある。発達早期の母子関係を重要視する理論体系（対象関係論など）に依拠する分析家には、エディプス状況以前の状況を素材とした夢を持って来るようになることがある。このような状況は偶然の産物ではない。夢は患者の心の深層を反映するばかりではなく、分析家と患者の関係のあり方をも反映する。その意味で、夢分析はある種の相互交流のプロセスである。

## 夢恐怖症 oneirophobia

フロイトによる夢分析理論とその方法は、夢の顕在内容から潜在内容を読み解くという夢に対する系統的接近法を提示することで、分析家の日々の実践の強力な助っ人となった。しかし

この助っ人はのちに、その意見の生硬さと狭隘さによって時に分析家を悩ますことにもなった。複雑な記号の読み替えとしてのみ夢分析を考えることは、分析家の役割を心的世界の翻訳者の位置に固定する。分析家は必然的に心的世界の辞書的知識を求められることになる。しかしこの辞書は、その訳語の妥当性が当の辞書を用いた分析作業の結果によってのみ保証されるという性質のものであり、量的な問題のみならず、本質的な問題をも含んだものである。

その結果生じる現象の一つとして、臨床家の間に広く見られる夢恐怖症 oneirophobia を考えることができるだろう。夢恐怖症とは、臨床の場における夢に対する苦手意識が昂じたものである。患者が夢を報告すると不安と緊張が高まり、何か適切な解釈をしなければというプレッシャーを感じ、さらにはそれでも何とか捻出した自分の解釈に自信を持てないでいるという状態のことである。これは、臨床活動を始めたばかりの臨床家の間のみならず、臨床経験を重ね、さらには分析理論を熱心に学んでいる臨床家の間にも見られる現象である。

この夢恐怖症は、フロイト的な夢理解の限界を臨床家が直感した結果の一つの表れとして考えることができるかもしれない。夢の潜在内容の解読作業としての夢分析の方法は、それが机上を離れて臨床現場に単独で持ち込まれる場合、今－ここでの臨床の場において生起していることを部分的にしか説明しない。その場合に生じるある種の違和感を臨床家は夢恐怖症として体感するのかもしれない。

夢の多元論的理解は、幾分逆説的ではあるが、夢恐怖症に対する対処法の可能性の一つであろう。夢を複数の観点から同時に考えることの可能性と必要性を考えることで、夢分析には「正答」はなくなる。このことは恐怖症を減ずるのに十分効果があると考えられる。もちろん、夢に複数の意味があり得るということを受け入れるということは、「正答」がないということとは違うのではないか、という疑問は残る。夢に複数の意味があるということは「正答」が複数あり得るということであり、そこには複数の「正答」の間での優劣が生じ得る。そうすると、得られた恐怖症状の逓減は不安の量的拡散の結果に過ぎなくなる。

しかし、先に挙げたような夢分析を二つの側面から考える夢分析の方法は、夢恐怖症に対して、量的解決以上のものをもたらす。夢分析を、今－ここにおける関係性の展開のプロセスの一つと考えることは、提示された夢に対する分析家の情緒状態（反応性の、あるいは個人的な）をも夢分析の文脈に直に組み込むからである。すなわち、分析家が夢素材を前に不安になったり、卑屈になったり、あるいは傲慢になったりすることがあれば、それは夢分析という作業一般が分析家をそのような気持ちにさせているというだけではなく、夢の個別の内容が分析家の中にそのような情緒状態を呼び起す何かを包含している可能性、あるいはさらには、そのように分析家が患者の前で感じているという事態そのものが夢分析の対象である可能性を示しているからである。

## 多元的夢分析の技法

臨床場面において夢を扱うことの実際的困難についてさらに論じることにする。その困難は複数の要因によって説明されるが、上述したようにその一つは、夢分析には複数の切り口があり、かつそのどれもが重要であることだ。夢の機能とその理解は多様である。M. J. ブレッチ

ナー（2001）は、夢の機能として、良く知られているフロイトの願望充足説やユングの補償説に加え、感情の調整、夢以外では伝えることのできないことの伝達、言葉にすることのできない思考の構築、新しい意味の創造、などを挙げて論じている。

ブレッチナーが挙げた夢の機能は、そのどれもが、意味的側面とプロセス的側面の両方をある程度含んでいる。だがその程度は様々である。例えば、フロイトの願望充足理論は、既に見たように、かなり意味的側面に傾いている。一方、思考の構築としての夢、新しい意味の創造としての夢という考え方においては、プロセス的側面がより重視されていると言えるだろう。それはどのようなものか。夢は、既に意味の決まったもの、フロイト的に言えば幼児的願望を何とかして夢の中で実現しようとするものであり、その目的のために偽装が必要となるのだった。このフロイトの考え方からすると、夢が奇妙であるのは不快な潜在内容の偽装のためである。しかし、ブレッチナーが論じているのは、これとは全く異なる考え方である。ブレッチナーは、人間はランダムにアイデアを生産してしまうものだが、そのようにしてランダムに生産されてしまった思考を創造的に用いることは人間の進化にも一定の役割を果たした、と論じている。これをブレッチナーは「夢のダーウィニズム oneiric Darwinism」と呼んでいる。夢分析は、より深く、より一層真実であるものとしてコード化されているものを暴き、解釈する、という側面だけではなく、夢見手の中で未だ意味が定まっていない状態であるものを受け取り、そこから意味を新しく考えて行くという作業を含んでいる。

このように色々な夢理論について理解し、それにもとづいて臨床実践を行っていく上で大切と思われるのは、意味的側面であってもプロセス的側面であっても、様々な程度で様々な理論に含意されているのであって、どれか一つの意味的理解やプロセス的理解に拘る必要はないということだ。ユングがフロイトの夢分析に向けた批判には一理あり、そして同時に、フロイトの願望充足理論が当てはまる臨床状況は依然として存在する。

これからさらに、夢のプロセス的側面に関してさらに詳しく論じる。夢をプロセスとして理解するという観点は、夢が相互交流の一形態であるという考え方を提供している。夢分析とは、患者の心の中に埋め込まれたものの分析家による解読作業であるだけではない。患者と分析家が共同で行う夢分析は、二人の相互交流である。

## 解離としての夢

夢分析のプロセス的側面を端的に示している考え方に、夢をある種の解離として捉えるものがある。一般に解離とは、過酷な外傷体験など自己にとってあまりにも耐えがたい体験の際に防衛的に作られる意識変容状態のことを指す。精神分析は長らくこの解離の機制ではなく抑圧の機制を中心に心的機制を論じてきたが、近年、関係学派と呼ばれる学派内部を中心として、この解離を主たる心的機制として考える動きが出てきた。同学派の分析家で、H. S. サリヴァンの流れを汲む P. M. ブロンバーグは、自分が誰であるかそして相手が誰であるか、そのことについて受け入れることのできない知覚に患者が直面するとき、それが「私ではない私 not-me」として解離される、と論じる。例えばブロンバーグ（2006）は、「患者が夢を持って来るとき、分析的な課題は、患者が夢見手を呼び入れることができるようにすることである。……

夢は、日常においてもっともありきたりの、心の解離的活動として考えることができるかもしれない。」と述べている。ここで着目しておくべきことは、ブロンバーグは欲動論的に発想しているのではなく、外界からの刺激、知覚がどのように捉えられるかを重視しているということである。関連して、E. タウバーと M. グリーン（1959）は、閾値以下の知覚が意識状態の中に様々に潜んでおり、それが夢という場に現れて出て来ることを論じている。ブロンバーグは、心の解離モデルとタウバーとグリーンの閾値以下の知覚の場としての夢という考え方を結び付け、夢とは解離された関係性の場である、と論じている。

ブロンバーグの解離としての夢の理解は、臨床的仕事に大きな影響を与える。ブロンバーグにとって大切なことは、隠され偽装されたものを掘り出すことではなく、閾値以下に留まっている受け入れられない知覚およびその知覚の主を面接室の中に引き入れ、今－ここに登場してもらうことである。これは、夢の「解釈」の作業以上のものであることをブロンバーグは論じている。それはもはや、夢に意味を与える作業ではなく、夢見手が経験できることを広げること、夢見手の自己を拡張するプロセスである。

このように考えると、夢分析の臨床において「本当の」意味を分析家として知っているかどうかを思い悩む必要はあまりない。大切なのは、隠された意味の暗号を解読できるかどうかではなく、表現を拒まれていた夢見手に出会うことができるかどうかである。したがって、夢恐怖症に陥らずに夢について語り合うことができることそれ自体が、本質的に重要である。夢とは、未だそこにあることを許されていない意味が到来する機会である。そう考えれば、分析家との関係性が夢内容に影響を与えるということは、もはや不思議なことではないだろう。その意味で、夢分析が相互交流的であるだけではない。夢は相互交流そのものである。

## 夢の循環再エナクトメント[1)]と逆転移

次に、夢の「循環再エナクトメント」という考え方について述べたい。ブレッチナー（1995, 2001）は、E. A. レヴェンソン（1983）、B. ジョセフ（1985）らの仕事に言及しつつ、夢の内容が、夢を分析する面接中にそのまま展開されてしまう事態について論じ、それを「循環再エナクトメント circular reenactment」と呼んでいる。ブレッチナーによれば、夢の解釈をしている分析家とそれを聞いている患者の状況が、まさしく夢そのものに酷似しているという事態が起こり得る。例えば、誰かにマゾヒスティックに従っている夢として解釈を患者に伝え、その解釈を患者が受け入れる状況が、分析家の解釈にマゾヒスティックに従う患者としてまさしく夢の再現になるという事態である。そして、夢の再現としての分析状況は患者の内的世界に取り込まれ、さらに夢の世界に変化を与えていく。それがまた再現されて、と循環は果てしなく続いていく。

このことは、エナクトメント論において、一般化された形で論じられてきた。例えば、レヴェンソン（2006）は、エナクトメントとは「話されていることの行動的部分」であると論じている。フロイトは、運動あるいは行為から思考過程を一貫して区別していた。そのような理解に基づくと、言語化されていないからこそ行動化されるのであり、言語化された上でかつ行動化を伴うということはない。そのような事態は、言語化が不十分な場合にのみ生じる。しか

しレヴェンソンは、そのように判然と言語と行動を分けることはできないと論じる。そして、同様のことは夢分析においても当てはまると続ける。レヴェンソンによれば、夢分析を行うという形で言語に落とし込もうとしている状況そのものが、そもそも夢としてしか表現されることのない解離された自己の表現となっているという可能性が依然として残る。言語化されていない部分を完全に取り除くことはできず、したがって行動化された部分は残存し続ける。

この状況を乗り越えるための特別な方法はないことをレヴェンソンは論じる。分析家は、自分には盲点があることを認め、転移－逆転移状況を延々と演じ続けるエナクトメント状況から身を離すべく努めるしかない。そしていかに務めようとも完全には身を離すことはできないが、その限界を抱えながら、起こっている状況への「好奇心」を失わないことが分析家の資質である（D. B. スターン，2009）。夢分析についても同様のことが言える。分析家は、いくら自分自身が分析されようとも、完全に死角がなくなることはない。したがって、夢の分析のプロセスの中にも、分析家の逆転移の要素が容易に入り込んで来る。一つの例は、先ほど挙げた循環再エナクトメントである。自分が果たしてしまっている役割を分析家がいつも完全に把握できるのだとしたら、循環再エナクトメントのような事態は起こらないはずであるが、実際はそうではない。

関連することとして、スーパーヴィジョンとしての夢、という考えについて触れておきたい。患者の内的世界がエナクトされ、さらにそれが再び内的世界に影響を与えるという循環について論じたが、患者がこのプロセスについて意識的に言及できる範囲は限られている。そこで、患者と分析家の関係性が無意識の世界に与えている影響について調べるために夢を用いることができる。この考え方は、夢が患者の心の中に患者固有の産物として埋め込まれているという考え方からは導き出されない。夢には私的な側面と社会的な側面があるという考え方に基づくものである。

夢に現れている関係性が全て患者側の要因に還元できると考えるのは行き過ぎであろう。分析家の実際の行いが夢に与える影響を十分考慮せず、患者の中に予め存在した世界が分析家に転移されているという観点は確かに重要であるが、その観点のみから理解し続けることには問題があると私は考える。夢は、分析家の患者に対する行い、さらには分析家という個人を患者がどのように捉えられているかについて、ある種のスーパーヴィジョンとして貴重な情報源たり得る。分析家自身について患者が抱く考えは、しばしば患者の内部に羞恥と不安を喚起するために、サリヴァンの言うところの「選択的不注意」の対象になってしまう。そこに分析家が踏み込むことが重要であろう。

## ビオンの夢理論

これまでの議論は、現代の精神分析の流れの中でも、米国を中心に発展した関係学派における議論を中心に扱ってきた。それ以外にも興味深い夢理論が様々な学派的立場から論じられているが、ここではその中でも、ポスト・クライン派の論客であるW. R. ビオンの議論に手短に触れておきたい。理論的系譜を異にするものの、ポスト・クライン派の議論は実はブロンバーグやブレッチナーの議論と通底するところがあると思うからである。

ビオンは、感覚印象 sense impressions はアルファ機能[2)]によって夢の中に見られるような視覚的イメージに近いものに変換される、と論じた。ビオン（1962）はさらに、「アルファ機能の失敗は、患者が夢見ることができないことを、したがって眠ることができないことを意味する」と述べている。ビオンによれば、夢が意識と無意識を創り出すのであって、逆ではない。

このビオンの考えを受けて、T. H. オグデン（2003）は、次のように述べている。「夢を見る（夢として体験する）代わりに、アルファ機能不全の者は、生の知覚データを留めるだけである。」「ビオンにとって、夢見ることとは……無意識的な心理的作業を含まなくてはならないが、それは体験の諸要素（それらは記憶として保存されている）を結びつけることによって夢－思考を創り出すものである。」

このビオンの論は卓見であると思う。ここで、ビオンの表現の仕方では、「夢」は、もはや我々が知っているところの普通の「夢」ではなくなっているということに注意が必要である。ビオンのいう「夢」は、ある種の仕分けの機能、意味の与えられていないものに意味を与える機能一般のことであろう。いわゆる我々のいう「夢」を見ることのできる患者であっても、ビオン的な意味では「夢」ではない、ということが起こり得る。

それでは、我々の普通の「夢」は何なのか、という疑問が残る。私は、ビオンのいうところの「夢」の不在とは、ブロンバーグが論じているような、解離の状態に近いのではないかと考える。すなわち、夢見手の不在の夢、夢がそれ自体で勝手に走り出してしまっている状態、暴走する即物性を止める内省のない状態、それがビオンの言うところの夢の不在であろう。

ここで論じられている、「生の知覚データ」とは、ビオン流の他の言い方をすればベータ要素[3)]のことであるが、それはブロンバーグが言っているところの、受け入れられない知覚、言い換えれば解離された知覚に近いものであろう。関係論的な考え方がビオン的な考え方と異なるのは、ベータ要素が内的な衝動と結び付けられる一方、関係論的にはそのような衝動を想定していない点である。データは、内部から来ることもあるが、外部から来ることもあるのだ。また、夢分析にあたって大切なことは、ビオンの考えでは、分析家がコンテイナー[4)]となって患者の代わりに夢見ることであるが、ブロンバーグの考えではそれは「夢見手を呼び入れる」ことである。ブロンバーグは、出会いの契機を強調しているが、ビオンのように、ベータ要素の解釈によるコンテイニングといった、分析家の特異的かつ特権的な力を論じていない。

さらにビオンの影響を受けている R. M. S. カソーラ（2012）は、「三者的空間 triangular space」すなわち患者と分析家という二者関係を超えて第三の立場から俯瞰し得るような空間が存在しないことによって、象徴化と夢見ることが不可能になる、と論じている。そして、夢見ることのできない二人、すなわち患者と分析家の衝突は、「二人にとっての非－夢 non-dreams-for-two」として理解することができ、それがエナクトメントとして通常理解されているものだ、という興味深い議論を論じている。このようなエナクトメントの離解は、ブロンバーグ流の解離モデル的な理解と大分重なってくることは明白であろう。

## 臨床例

ここまで論じてきたことを臨床的に考察するため、次に、精神分析的心理療法中に報告された夢とその分析の例を提示する。私が実際に経験した事例であるが、プライバシー保護のため、大幅にカモフラージュを施している。

A子は30代の女性である。成功した事業家の父親を持つ彼女は、経済的に恵まれた環境で育った。しかし思春期に至ると、彼女は、自分に向けられている愛情は、自分という人間そのものに対して向けられているのではないのではないか、という疑念を抱くようになった。一人っ子であった彼女は、両親が事業の跡継ぎとして自分を考えており、そういう存在としてしか自分は受け入れられていないのではないか、と感じるようになった。彼女は、両親を、とりわけ父親を尊敬していたが、やがて父親の事業を継ぐことに対して抵抗感を感じ始めた。高校卒業後、彼女は遠方の大学に進学し、父親の事業と関係のない分野を学んだ。大学生活を楽しんだ彼女は、卒業後彼の地で就職し、しばらくの間、充実した生活を送っていた。しかしその後精神的に変調をきたし、実家に戻った。彼女は父親の事業を手伝い始めた。

A子の精神状態は一時的に落ち着いた。しかしその後深刻なうつ状態に陥り、私が勤務していた病院に通院を始めた。彼女の過去と家族の問題、そして将来を話し合うため、週1回の精神分析的心理療法を開始した。

A子は、いつも周りの期待に合わせるように振る舞ってきたようだった。そんな中で彼女は、自分が実際には何を望んでいるのか皆目見当がつかなくなっていた。一方、A子にとって、父親は非常に力強い存在だった。彼女は父親の言うがままにはしたくないと思う一方、父親のサポートなしでは生きていけないとも感じていた。

ある夢の中で、A子は、化粧を落としたのにも関わらず、翌朝になっても化粧が残っているのに気づいた。彼女は鏡に向かって、化粧を一生懸命落とそうとするが、なかなか落ちない。なんで落ちないのか、と彼女は気になった。場面が変わって彼女が近所を歩いていると、父親の秘書の女性に出会った。その女性はとても疲れていて、でもなぜか真っ赤の、似合わないワンピースを着ていた。私は、その秘書の女性はA子の一部だ、と解釈した。落ちない化粧と似合わない服は、彼女が自分を父親の娘としてではなく、父親の秘書として見なしていることを表していた。

その後のいくつかの夢の中でも、自分が望んでいないにも関わらず何かを手にしてしまっている、というテーマが繰り返された。A子が本当に何を望んでいるのかはなかなか話題に上らなかったが、そのことに関連して、ある時彼女は次のような夢を報告した。その夢の中で、彼女はある会合に出席していたが、そこには彼女が大学時代に付き合っていた男性がいた。彼は遠くにいる。どうせ彼はこちらを見てもくれないだろう、と最初彼女は思った。しかし会合が終わると、彼女は思わずその男性の名前を声を上げて呼んでいた。彼女の予想に反して、その男性は彼女に思いやりのある反応をしてくれた。夢から目覚めたA子は、懐かしく、とても嬉しい気持ちに包まれていた。その男性について話を聞くと、その男性は自分の持っている数少ない良さを褒めてくれた人だった、と語った。しかしその人が遠方に就職すると、どういう

わけか彼女は自分から別れてしまった。私は、A子にとって自分の心の中に自分自身にとって良いものを置いておくことは難しいようだ、と解釈した。A子自身にとって良いものは、両親が望んでいるものではなく、したがって両親との関係を損いかねない、とA子は感じていたようだった。A子は私の解釈を聞いて頷き、さらに、自分が手元に置いておけなかったものについて連想を語った。

これらの夢の内容は、A子が本当に欲しているものを手元に置いておくことがこれまで難しかったこと、しかしそれが本当はとても重要であることを一貫して示唆していた。夢内容をそのまま解釈すると、不自然な化粧を落として、好きな男性と一緒になった方が良い、という示唆が入り込んでしまうと思われたが、実際、私が行った解釈にはそのような響きがあったと認めざるを得ない。もちろん私の解釈が明らかに間違っていたということではない。実際、私の解釈に対してA子は肯定的に反応した。

しかしここで、夢分析のプロセス的側面にも注目してみたい。夢分析の状況そのものが夢の内容そのものになってしまうという、夢の循環再エナクトメントについて論じたが、それはここでも起こっていないだろうか？私の夢の解釈、A子が自分が本当に欲しているものを心の中に置かず、人が望んでいるものを置いている、という解釈にA子が同意したとき、それは私への迎合になってはいなかっただろうか？そう考えてみると、確かにその要素があるだろうと私には思われてきた。それでは、私の夢の解釈に迎合している、ということを加えて解釈すれば、この状況から身を離すことができるのだろうか？それでもなお、新たに同様の循環に嵌り込んでしまうということはないのだろうか？斯く斯く然々のようにすればこの循環から抜け出せる、という処方は存在しない、ということがレヴェンソンが論じたことであり、それはここでも当てはまると思う。

やがて私の心に浮かび上がってきたのは、私との心理療法自体がA子にとって極めて葛藤的な性質を持つものだという事実であり、それに対する特効薬はなく、その事実をここで生き抜くほかないという考えだった。ここで、A子が私との心理療法をどのように体験しているのかを表しているように思われた夢を紹介したい。

夢：見上げると、いつも見ている高いビルが斜めになって自分に覆いかぶさってきている。植木鉢位の硬そうなものが落ちてきて、自分に当たりそうになる。マンションの中に入ると、X階までのエレベーターのはずだったが、あれあれ、と思っているうちにそれよりずっと高層の階に行ってしまった。怖かった。

私のオフィスは、高いビルの中にあった。したがって夢の中の高いビルは、私のオフィスの場所を示しているようにすぐさま思われた。私のビルがX階にあったことは、私の推測をさらに強めた。高いビルは私であり、植木鉢位の硬そうなものとは、私の解釈のことだと考えられた。すなわちこの夢は、A子にとって私という存在は、彼女の遥か上から解釈を下す高いビルのような存在であり、彼女の視線の高さに留まっていない存在、すなわち父親のような存在であることを示している、と考えられた。私の解釈を受け入れることで、A子は確かに簡単に

上昇すること、すなわち知的洞察を得ることができたのかもしれない。しかし、それは急に上に行き過ぎる、すなわち洞察が急に進み過ぎる危険性を孕んだもので、A子はそれを恐れていたのだ、と私は思った。

この夢を受けて私は、A子が権威者との間で感じている葛藤の複雑さを改めて強く感じた。権威者とはA子の両親であり、そして私だった。私は、A子に両親からの自立を強く促すような方向に加担しないよう、自分自身を慎重にモニターするようになった。

その後も、A子は父親との間に葛藤な気持ちを持ち続けた。しかし一つ大きな変化があった。以前A子は、自分が父親と葛藤的な関係にあることそれ自体を自分が悪い存在であることの証として見なしていた。それが彼女のうつ気分の大きな原因でもあった。しかしやがてA子は、父親に頼りつつも一定の距離を保っている自分を、そのまま受け入れられるようになってきた。そこには一つの均衡があった。その均衡がいつまで続くのか分からないという感覚をA子も私も持っていたが、彼女の生い立ちを考えれば、得られた均衡は、それが仮に一時的なものであっても大切な均衡だ、とA子は考えられるようになった。そして心理療法は終結した。

## おわりに

夢分析には、夢内容の分析という側面とプロセスの分析という側面があることを論じた。A子の症例においては、私は権威者の望むように振る舞うというA子の在り方が夢の内容に表現されていたことを理解し、それを解釈としてA子に伝えた。しかしやがて、そのような解釈に耳を傾ける分析室におけるA子の在り方をまさしく夢の内容とするような夢が報告された。その夢は、A子の閉ざされた心の内容を表現している夢ではなく、私と彼女の間の相互交流を表しているものだった。ここで、私の気づきをA子に別の解釈として投与するということも可能性としては考えられた。それはA子によって受け入れられたかもしれない。しかしそれもまたA子の在り方そのものであり、やがて夢の中に取り込まれてしまうのではないだろうか？ここにおいてA子の夢は、もはや夢であるのみならず、分析室の中の現実の一部となった。治療的に大切だったのは、A子の葛藤的な在り方を解釈し尽くしてしまうことではなく、分析室の中でそのまま受け入れることだったのではないかと私は考える。そうすることによって、A子の自己は、それまでA子が体験していたものよりも、より幅の広いものになったのではないかと考える。

以上、現代精神分析における夢分析の一潮流について理論的および臨床的に論じた。夢分析はフロイトの時代に比べて遥かに複雑になった。解釈の可能性が広がったことで、臨床現場における不確定性は高まった。しかしそのことは決して臨床的可能性についての悲観的見通しを示しているわけではない。むしろ分析状況の不確定性の中でこそ患者が体験したことのない新しい相互交流のプロセスが始まるのであって、それはやがて患者の凍てついた心的内界を動かす力になるに違いない。

## 注

1) エナクトメント enactment とは、近年精神分析に関する議論においてしばしば取り上げられる概念で、無意識的素材が、治療の場において極めて隠微な形で行動として現れる事態を指す。主に分析家の側の行動に関して用いられる言葉であるが、その限りではない。逆転移の行動化に近い意味を持っており、その意味では破壊的であり得るが、近年その治療的意義についての議論が高まっている。実演とも訳出される。
2) 考えられることができない原始的思考を、ビオンはベータ要素と名付けた。これらは、考えることのできない原始的思考・情動体験であるが、母親の心的機能は、それを考えることのできる思考・情動体験（アルファ要素）に変換する。この機能をビオンはアルファ機能と名付けた。精神分析においては分析家のアルファ機能が問題となる。
3) （注２）を参照のこと。
4) ビオンは、精神分析のモデルとして、未だ考えられていない思考・情動体験（コンテインド）が、分析家のアルファ機能（コンテイナー）によって考えられるものに変化していくという、コンテイナー／コンテインド・モデルを唱えた。

## 文献


Bion, W. R. (1962) Learning from Experience. In: The Complete Works of W. R. Bion, Vol IV. Karnac Books, London.

Blechner, M. J. (1995) The patient's dreams and the countertransference. Psychoanalytic Dialogues, 5:1-25.

Blechner, M. J. (2001) The Dream Frontier. The Analytic Press, New Jersey

Brenner, C. (1969) Some comments on technical precepts in psychoanalysis. Journal of the American Psychoanalytic Association, 17:333-352.

Bromberg, P. M. (2006) Awakening the Dreamer: Clinical Journeys. The Analytic Press, New Jersey.

Cassorla, R. M. S. (2012) What happens before and after acute enactments? An exercise in clinical validation and the broadening of hypotheses. International Journal of Psychoanalysis, 93:53-80.

Joseph, B. (1985) Transference: The total situation. International Journal of Psychoanalysis, 66:447-454.

Levenson, E. A. (1991) The Purloined Self. Contemporary Psychoanalysis Books, New York.

Levenson, E. A. (2006) Response to John Steiner. International Journal of Psychoanalysis, 87:321-324.

Ogden, T. H. (2003) On not being able to dream. International Journal of Psychoanalysis, 84:17-30.

Stern, D. B. (2009) Partners in Thought: Working with Unformulated Experience, Dissociation, and Enactment. Routledge, New York.

Tauber, E. and Green, M. (1959) Prelogical Experience. Basic Books, New York.


（原稿受理日　2015年９月27日）